一八八三年九月七日（金）

師弟の語らい――秘密の話

タクール、聖ラーマクリシュナは、例のお馴染みの部屋で小寝台にお坐りになって、モニと二人きりで話をしていらっしゃる。モニは床に坐っていた。今日はキリスト暦一八八三年九月七日、金曜日、バッドロ白分六日目。夜のおそらく七時半時分。

聖ラーマクリシュナ「先日、カルカッタへ行ったよ。馬車で行く途中、窓から外をながめていたら、およそ生きて動いているものは皆、低い所を見ていた――誰もかれも胃袋のことばかり考えているんだ。みんな胃袋のために駆けずり廻っている。みんな、心は女と金のことに吸い寄せられている。だがまあ、一人か二人は上の方に目を向けて――神様のことを思っていたがね」

モニ「このごろは、一段と胃袋の悩みが増えまして――。英国人のマネをするようになって、だんだんゼイタクになってきたものですから、それで不満足感がますます大きくなってくるのでございます」

聖ラーマクリシュナ「あの人(英国人)たちは、神様のことをどう思っているのかな?」

モニ「彼らは、形のない神を信じているのでございます」

〔昔の話――聖ラーマクリシュナがブラフマン智によって見たいろいろのこと――イギリス人、ヒンドゥー、低いカースト、野獣、虫、糞、尿――すべてに一つの霊を見る〕

聖ラーマクリシュナ「わたしらの処にも、その考え方はあるよ」

しばらく二人は沈黙していた。タクールはご自分のブラフマン智の境地をお語りになる。

聖ラーマクリシュナ「ある日、わたしは見たんだ、一つの霊を――一つの同じものを。最初に見えたのは数えきれないほどの人間、動物、生きもの――その中には金持ちの旦那方もいたし、イギリス人も、イスラム教徒も、わたし自身も、それから隠亡（火葬をする人）、犬ころもいた。それに、ヒゲを生やした一人のイスラム教徒が手に土皿をもって、その中に米飯が入れてある。その皿の米飯を皆の口へホンの少しずつ入れてくれてね、わたしも一口味わせてもらった！

また別な日にはこういうことを見た――米飯や野菜やその他のいろんな食べ物が、ウンコや小便といっしょにあたり一面に散らばっている。突然、わたしの中から魂が抜け出て、炎のように一切のものをなめた。ちょうど、舌でペロペロなめるように、一つ一つのものを全部味わった。ウンコも小便もだよ！　――悟らされたんだよ、全てが一つ――不異だと！」

〔昔話――伴侶たち（従う人々）を見る――タクールはアヴァターラか！〕

聖ラーマクリシュナ「（モニに向かって）それから、こういうことも見せられたよ。信者たちがい

るのを――わたしに従(つ)いてくる人たち――わたしのほんとの身内をね。それからというものは、夕べの献灯(アーラティ)のホラ貝や鈴が鳴りだすとすぐ客殿(クティ)の屋根に上がって、夢中になって叫んだものさ。『オーイ、お前たちは誰だァ！　何処にいるーゥ！　はやく此処に来いよォー！』お前たちに会いたくて、わたしは死にそうだったよ。（訳註――この啓示のあったときは、もちろん信者はまだ一人もいなかった）

ところで、こんなわたしの見たものを、お前はどう思うかい？」

モニ「あなた様を通して、あの御方が遊戯(リーラー)されている。あなた様は道具、あの御方が使い手、という感じがヒシヒシといたします。神は他の人間を、いわば機械で大量生産されましたが、しかし、あなた様だけは自らの手でおつくりになったような気がいたします」

聖ラーマクリシュナ「そうかい。ハズラーが言うには、見神すると六つの力を獲るそうだが――」

モニ「純粋な信仰を求める人たちは、神の力や富など見たいとは思わないでしょう」

聖ラーマクリシュナ「きっとハズラーは、前世でみじめな境遇だったので、それで力だとか財産だとかにあんなにあこがれるんだろうよ。それにハズラーときたら、わたしがバラモンの女料理人と何を話してるか知りたがるんだよ。それからこう言うんだ。『私が寺院の会計係に話して、あなたのお入用のものは皆、調達させましょう！』って」

モニ「あっはっはっは、あはははははー」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハハ、あれはこんなことを言うもんだから、わたしはただ、黙っているだけなんだよ」

〔人間に化身した神は信者たちに素直に受け入れられる――厳(いか)めしさとやさしさ〕

モニ「あなた様が繰り返して何度もお話し下さるように、純粋な信者は神の威厳など要求いたしません。純粋な信者は、神をゴパール（幼児のクリシュナの名）のように見ていたいのです。はじめのうち、神が磁石で信者は針でございますが――しまいには信者が磁石になって、神が針になるのでございます――つまり、信者にとって神はかわいいものになるのです」

聖ラーマクリシュナ「ちょうど夜明けの太陽のようにね。その太陽は目に楽に見られる。まぶしくなく、むしろ気持ちのいい色合いなのさ。信仰者(バクタ)のために、至聖(かみ)はやさしい様子になって――あの御方は計り知れない力や威厳を脇に除(の)けて、信者たちのそばに顕れて下さるんだよ」

二人はまたしばらく黙っていた。

モニ「あなた様の見られたことは真実でございますとも。もしこれが真実でないなら、この世のことはそれ以上にまやかしでございます――なぜかといえば、道具である心は、一つあるだけなのですから。あなた様は純粋なお心でそういうことをご覧になり、私共のような心は、世間一般のことを見ているのでございます」

聖ラーマクリシュナ「お前、無常ということがよくわかったとみえるね！　そうだ、ハズラーのこと、どう思う？」

モニ「そのう、ある種の人物ではございます！」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハハハ……。そうだ、わたしは誰かに似ているかい？」
モニ「いいえ」
聖ラーマクリシュナ「誰かほかの大覚者（パラマハンサ）とは？」
モニ「いいえ、似ていらっしゃいません。あなた様と比較できる人はございません」
聖ラーマクリシュナ「ハ、ハ、ハ。アチーナ（未知）という樹を知らないか？」
モニ「いえ、存じません」
聖ラーマクリシュナ「そういう樹があるんだがね――誰が見てもよく見分けがつかないんだよ」
モニ「そうでございますか。あなた様を知ることも、到底できないことです。人はあなた様を理解すればするほど進歩します！」
モニは沈黙した。そして心の中で考えていた。タクールは〝夜明けの太陽〟とか、〝アチーナの樹〟の話をなさったが、これは神の化身（アヴァターラ）を指していらっしゃるのではないか？　これを人間遊戯（ナラ・リーラー）（神が人間の姿をして活動されること）というのだろうか？　タクールはアヴァターラなのだろうか？　それで、活動（リーラー）の伴侶を求めて、客殿（クティ）の屋根に上がってお呼びになったのではないか？　――『オーイ、お前たちは誰だァ！　どこにいるーゥ！　こっちへ来いよォー！』と？